参考資料４

海部会開催報告

目　次

〇第３回海の地域部会報告：10/23 1

〇第１回ＷＧ開催報告概要：4/21 9

〇第２回ＷＧ開催報告概要：7/5 10

〇第３回ＷＧ開催報告概要：7/7,7/21 11

〇第４回ＷＧ開催報告概要：8/12 12

〇第５回ＷＧ開催報告概要：10/18 13

〇第６回ＷＧ開催報告概要：11/5 14

〇第７回ＷＧ開催報告概要：11/5 15

矢作川流域圏懇談会「第３回海の地域部会」開催報告

1. 実施概要

(1)実施概要

○実施日時：平成 24 年 10 月 23 日(火)
15:00 ～ 17:00

○開催場所：
西尾市役所２階　22B 会議室

○参加者：23 名（事務局含む）

(2)内容

【会議議事】

１．副座長あいさつ
２．出席者紹介
３．今年度の部会活動報告
４．話し合い
(1) 全体会議に向けた活動のとりまとめ
(2) 来年度の海部会の活動内容について

会議風景（１）

会議風景（２）

2. 主な会議内容

第３回海の地域部会では、これまでのＷＧ等の活動報告を行った上で、残りのＷＧの進め方や次年度以降の活動方針、今後、山・川部会と調整したいこと等について意見交換を行った。

会議で話し合われた内容は以下のとおりである。

- ○ 市民の海への関心を取り戻す取り組み（絆再生）に関連し、今の環境教育の活動における問題が何かを、これまでの３ヶ年の活動の中の整理に加える。
- ○ 行政は、海岸管理等において何を目指しているのか、これから海地域が目指そうとしていることへの矛盾はないかなどについても意見を出しながら進めていく。
- ○ ごみ・流木の問題で矢作川と関係する海浜での活動を、次年度以降、いつどこでどのような活動ができそうか方針検討のためのたたき台を、情報を頂き事務局で整理する。
- ○ 県の漂着物の対策協議会が目指している方向等についても確認していく。
- ○ 栄養塩類の課題は、勉強会で課題の共通認識を図る提案があった。
- ○ 土砂収支の話もハードルが高い話で現在は棚上げ状態であるが、何らか議論は継続していきたいとの意見があった。
- ○ 各自の活動の中で自主的に収集している資料（写真など）がまだ十分に活用されていないという情報共有の課題があることが分かった。
- ○ 海部会から川部会への全国一の生産量を誇る一色うなぎを維持していくために、遡上する魚種の立場から矢作川を甦らせるということを念頭においた提案があった。
- ○ 12 月の海の勉強会において水産試験場からも情報提供を頂くことが決定した。

3. 議事概要　（・　ご意見、提案　　➢　回答）

（１）副座長あいさつ　名城大学大学院総合学術研究科特任教授　鈴木輝明

（２）会議出席者について

新たなメンバーの追加があったため、参加者全員が改めて自己紹介を行った。

（３）今年度の海部会活動報告

事務局より、海部会が進めている４つの課題について今年度の個別の取り組み状況について報告するとともに、参加された方々に感想を頂いた。

・ これまで東幡豆にあれほど多くマテガイがいるということを参加して初めて知った。現地へ行って見るということはすごく勉強になる。（松井）

・ 東幡豆には島や干潟がある非常に良い場所であるということを、まだ多くの西尾市民が知らないと思う。知ってもらうために地元小学生を海へ連れてくる取り組みを森と緑の関係の助成金をもらい継続的に進めている。（石川）
  - ➢ 運営側としての問題はあったか？西尾市内でも特に少し海から離れた子ども達は皆参加したいと思うはずだが、学校行事として責任がもてるか、受け入れ側もそうした認識を持ってできるか等に問題はないか。（鈴木）

・ 学校を動かすのは非常に大変である。教育長の方針次第というところもある。（石川）
  - ➢ 環境教育については、今後どのようにしていくか、参加してもらうために何が問題になっているのか、学校との関係以外にもあるかないか等を今後の活動方針を検討するためにも、３年間の活動の中でも少し整理をしておきたい。（鈴木）

・ 奈佐の浜プロジェクトは、三河湾から流れてきたものを確認することを１つの目的としているが、参加人数が増えると活動範囲とのバランスがとれず、参加者に目的が十分に浸透しないという課題が見えた。もう一つの目的である交流については、愛知県漁連の漁民のもりづくり活動などで行政間の連携が出てくると感じた。（井上）

・ 海岸清掃で集めたゴミの種類や由来はある程度、事務局や３県１市がまとめているのか。（鈴木）
  - ➢ 奈佐の浜では、すぐ後ろの焼却場で処分するため木質系何トンというような整理であり、３県１市で整理はしていない。（井上）

・ どこから流れてきたものか分からないと対策検討につながらないのではないか。（鈴木）
  - ➢ 発生元については、住所の書かれているライターを探すことや、環境省が発信機を付けたブイで調査をした結果が参考になる。矢作川流域の調査はない。（井上）
  - ➢ ゴミは、集めてもすぐに溜まる。発生元を絶つことが重要と考えている。（事務局）

（４）意見交換

１）全体会議に向けた活動のとりまとめ

事務局より、海地域部会における３ヵ年の活動総括（中間報告）と、今年度予定している残り２回のワーキングと勉強会の予定について説明した。

２）本年度の活動内容、今後の活動方針等について

- 次回のワーキングでやろうとしていることがよく分からない。（石川）
- 例えば、今の観察会に具体的な問題があるかないか、なかなか進まない問題は何かなどを明確にしていかなければ、関係者を集めて議論することもできない。（鈴木）
- もう１つの例としては、答志島の活動を三河湾内でもやろうとすれば、具体的にどこでどのようなやり方ですれば良いのか。原案を誰が考えれば良いのかなどを事務局と相談することも１つの議題になる。（鈴木）

- 干潟再生といってもコンクリートで護岸整備されている状況をみると、再生に向けて何が重要なのか海のことを知らない人が多いと感じた。（大矢）
  - 現状が干潟の沿岸域を整備し過ぎていることが何か問題があるのではないかという提案だと思う。親しみやすい護岸をつくるといって階段護岸のブロックになる。再生というなら本当の意味の再生でないと意味がない。干潟についても同じで砂を入れれば干潟という感覚では困る。（鈴木）
- ごみは、岩場や砂場に寄る特性があり、護岸や堤防はその様な特性も考慮した整備である必要がある。（石川）

- 干潟の問題が一番大きな問題であるが、それを再生、改善するためには、どのような議論をすればよいかという中から今の４項目が出てきたと理解している。次回のワークキングでは、単にハードのアクセス性だけでなく、どうすれば市民が海に再び目を向けてくれるかを考えることも大切だと考えたものである。（事務局）
  - それは、話し合う中身として適当か。
  - 海岸配置や漁港配置などの具体的な行政目標と関係しないのではないか。進めようとしたときに行政にとって問題はあるかないか、努力すればできるものなのか、できないものなのか。漁協にとっても、海岸を解放したいのはやまやまだが、全部解放したら困るなど課題は色々あるので、このように抽象論でなく焦点を絞って議論を進めて欲しい。（鈴木）

- 博物館のような生き物を集めた展示場があれば、生徒も観察するのではないか。（長谷）
  - 春の大潮のときに市と漁協でタイアップして自然観察会をやることを市民に PR し、一般の潮干狩り客も少し勉強できるというようなフレキシブルな場づくりも１つの提案だと思う。（鈴木）

- 行政担当者には、今の役所の仕組みとしての海岸管理と、流域圏全体で豊かな海を実現するために干潟、浅場を再生しヨシ原を再生すること等との矛盾があるかないか等、行政としての考えについても発言を期待している。（鈴木）
  - ➢ 経験上、ハードの意見なら出せるが、環境などの事だとなかなか意見が出せない。（河原）
- 役所での立場を理解できるが、少し壁を取り払っていかないと市民だけで言い合っていても絵に描いた餅になりかねない。逆に、行政が動きやすい状況をどうやってつくっていったら良いかも重要なテーマになると思う。（鈴木）

- 奈佐の浜について補足説明をすると、３県１市が手をつなぐスタートになったもので、奈佐の浜で清掃活動するという行動を目標としているものではない。伊勢湾全体の問題から三河湾の問題を、漁民、行政みんなで考えて手を結んで考えていくためのキーワードだと理解している。（事務局）
- 三河湾でも、一色地域は寄る場所がないので港へ寄ってくるというような特徴もあるので調査が必要だと考える。（石川）
  - ➢ 流下から漂流、漂着の推測できるプロセスを元に、港湾局や県や市などの管理者とも意見調整していくと、削減の対策検討につながると考える（事務局）

- 小枝や葉などの有機系ごみは、小型生物の捕食対象となり生態系の一部を形成することもあり複雑な問題である。県の対策協議会の動きを見ながら、懇談会でどこまでを扱っていくかを、今後の３ヶ年の入り口で少し整理していく必要がある。（石田）
  - ➢ そこの整理は必要である。今日は不参加なので意見が聴けないが、県とも連携しようという話にはなっている。（事務局）

- 奈佐の浜プロジェクトは３県１市の連携の動きがスタートではなく、疲弊した山間部の地域再生をするために現地の状況を知り、その後、流域全体の問題へ目を向けようという動きの延長にごみの多い答志島に目が向いた話である。NPO 活動としての３ヶ年準備期間があったからこそ上手くいった。来年は田原と答志島で予定している。（井上）
  - ➢ それらの動きについては、どのような考えで、どこをやるのか等を事務局で整理すると良い。（鈴木）
- 佐久島にもすごく汚いところがある。奈佐の浜のような集まりやすい場所なのか聞いてみたい。（大矢）

- 三河湾にゴミ収集船はないのか。名古屋港では活躍している。（長谷）
  - ➢ 各港には清掃船は何隻かある。ただ、それは港の中のごみを拾っているだけで、伊勢湾・三河湾という大きな海域でごみを拾っている船は、中部地方整備局が所有している１隻のみ。（神谷）

3）次年度の海部会の活動方針について

・ 今後の活動方針についてはいくつか提案が出たが、それらも踏まえて提案をお願いしたい。（鈴木）

〔ごみ・流木関係について〕

・ 奈佐の浜プロジェクトがすごく成功しているので、例えばそれを三河湾版で佐久島のごみの吹きだまりを対象に実施すると子ども達が喜んで来ると思う。（大矢）
  - ➢ 佐久島という場所を特定するかは別として、田原の方でも計画があるということなので、三河の中で矢作川とごみ問題で関連する海浜でこういう活動をどうするかということを検討していくということで整理したい。（鈴木）
  - ➢ 事務局で来年度以降、いつどこでどういった活動ができそうかたたき台の案を作成すると良いと思う。（鈴木）

・ 家庭ごみや事業系ごみを流し、どこへ流れるかを調査したら良いのでは。（松井）
  - ➢ 法律上の問題や制約もあるかもしれない。一度、市民ができるごみ流下の実験的方法がないか、どのような調査ができそうかを先ほどの環境省の調査も参考に整理すると良い。（鈴木）

〔海の豊かさに係わる栄養塩類について〕

・ 海を豊かにするには、栄養が足らないという議論が必要ではないか。魚介類の餌として十分かどうかは上流と密接に関係してくるので、議題に入れて欲しい。（井上）
  - ➢ 豊かな海を実現するためには二つ、栄養が潤沢に流れ込む流域圏の管理の仕方と、それから海へ流れ込んだ栄養素が赤潮とか海の底に沈まないような生き物がそれらをためておくような場所、つまり干潟とか浅場とか藻場とかヨシ原をもっと積極的に確保すべきという論議がある。学者の中でもいろいろな論議があり、国土交通省の伊勢・三河湾の再生の委員会でも非常に大きな話題になっている。
  - ➢ これは、今の段階で部会の中で論議するのは少しハードルが高い。まずは勉強会で課題の共通認識を持っていただくことを取っかかりにするのが良い。（鈴木）

・ 海に生物がいないと栄養塩の利用もないがその生物はどうかというと、底曳き調査で 20 年前と比較した結果、多少、生物が戻ってきている感じがある。（蒲原）
  - ➢ 今の話は今度の 12 月の勉強会に補足的にテーマを追加してもらうと良い。（鈴木）

・ 勉強会では、航路・泊地、デッドゾーンの話も取りあげたい。（井上）
  - ➢ 航路・泊地を機能的に確保することが、三河湾の生態系に影響を与えていることにどこで折り合いをつければ良いかという問題は、川におけるダムの利水、治水と河川生態系と同じ問題であり、そこを触れずに話はできない。（鈴木）
  - ➢ ぜひ、整備局の方も参加していただき、活発に意見を出し合う中で何かしら妥協点が

見つかる可能性や、場合によっては新しい技術の展開もあるかもしれないと思う。

- ➢ お互い耳の痛い話が当然あり、産みの苦しみであるとは思うが、少なくともこのワーキングは耳の痛いことも覚悟の上で議論し合うという姿勢でやっていきたい。（鈴木）

〔土砂収支の問題〕

- ・ 土砂収支の問題は、市民の活動でやるのは難しいということで棚上げになっているが、論議だけは進めて行きたい。伊勢湾再生・三河湾再生のためには、干潟、浅場を造成することが絶対必要だが、上流にある砂を運搬するとなると費用の問題で止まってしまう。税負担とするか、受益者負担（治水受益者、漁業生産受益者）とするかなどの論議をしないと、この土砂収支の話はいつまでも解決しない。（鈴木）

〔検討体制について〕

- ・ 水産庁の全国的な事業に干潟や浅場、藻場の保全活動があるが、漁業者の方々の活動に一般の市民の方々が連携するということが全国的に見ても非常に少ない。海部会で作業するのに漁師の方々に積極的に発言していただかないと絵に描いた餅みたいな話になると思う。組合長が忙しければ青年部の方などに参加して頂きたい。（鈴木）
  - ➢ 現状は、出てこない。三河湾再生などに係わる会議に漁業者が入っていないことは問題で参加することは大事。（石川）

〔情報提供などに関する意見〕

- ・ 漁協婦人部が連携して海岸清掃を年に３回ぐらい実施している。ビニールを食べて死んでしまうスナメリ、上流からくる流木やごみなどの現状など、議論をする前に海のことをよく知ってもらいたい。（鈴木）
  - ➢ 新しい調査も重要であるが、自主的に収集されている資料もあるようなので、それらをもっと資料に活用できると良い。（鈴木）

〔海部会から川部会への具体的な提案〕

- ・ 今、シラスの遡上が激減している。ウナギと関連して川の環境や海の環境、どういうことが問題なのかを一色うなぎ漁協の組合長に少し発言していただきたい。（鈴木）
  - ➢ ウナギが生息する環境が河川に非常に乏しいというのが大きな課題である。ヨシ原などにウナギが生息し、カニやエビ、ミミズなどを食べているようなので、コンクリート護岸ではなく、もう少し自然の環境を取り戻し、河川環境を良くしたい。（大岡）
- ・ これまで、遡上する魚種の立場からの海部会から川部会への具体的な提案や投げかけはなかったと思う。全国一の生産量を誇る一色うなぎを維持していくために矢作川を甦らせるということを念頭においた提案も非常に重要である。（鈴木）

以上

矢作川流域圏懇談会「第１回海部会ＷＧ（干潟再生関係）」開催報告

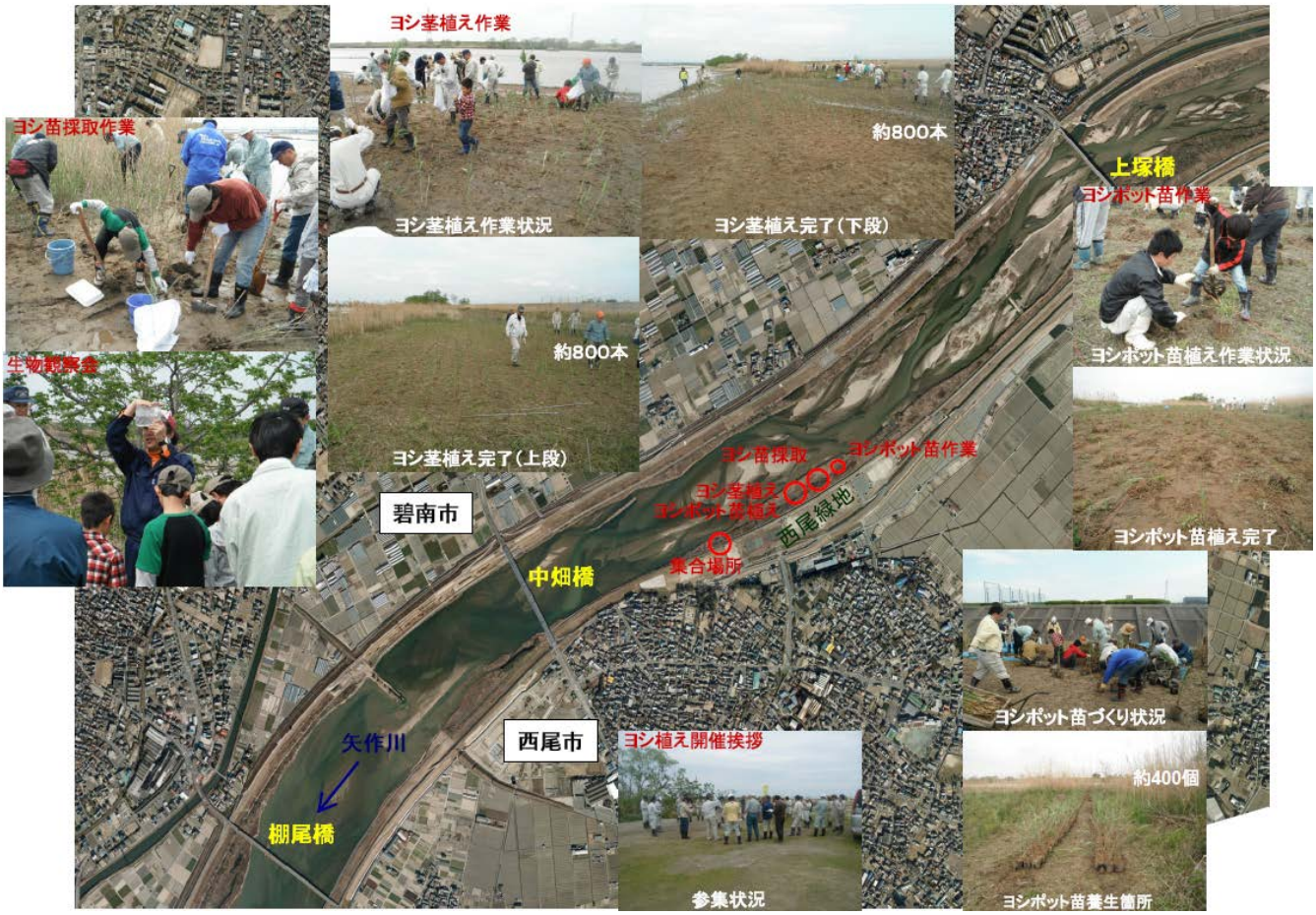
○ 第６回市民企画会議にて、**豊橋河川事務所が主催する『ヨシ植え』について、川・海部会で協賛**することとした。
○ 参加者より、教育委員会を通じ児童の環境教育の一環として**親子参加できるイベントにしていく提案**を頂いた。また、**近隣小学校へのチラシ配布による募集方法の提案**もあった。

1. 実施概要

子供を含む一般参加者及び関係者の約４０名が、ヨシのポット苗を約４００個の作成と直植え約１，６００本、ポット苗植え戻し約４００株を行った。

開催日時：平成 24 年 4 月 21 日（土）
集合場所：矢作川 5.6k 左岸付近
作業時間：午後 1 時 00 分～午後 4 時 00 分頃迄

平成 24 年 4 月 21 日（土）　矢作川ヨシ植え作業写真



矢作川流域圏懇談会「第２回海部会ＷＧ（準備会として実施）」開催報告

開催日時：平成 24 年 7 月 5 日

○ 第２回ＷＧは、今年度の具体的な**行動計画等を話し合う準備会議として開催**した。

○ 海の民（漁協等）の意見を入れるためにどうすれば良いかについても話し合い、観察会等の**積極的な活動を行っている東幡豆漁協の活動に学び、協力を得ていく方向で進める**ことを確認した。

○ 具体的な活動として、ゴミ・流木については、まずは**実態を把握する調査について関係者に提案し、議論のたたき台となる案を準備する**ことを話し合った。また、流域圏の活動として調査者と片付ける人の架け橋をすると良いのではとの意見が出された。

○ 豊かさを一律に定義できないため、生き物調査を通じて**干潟の健全度を一律に評価する指標を定めることが難しい**という課題が明らかになった。

○ ８月中の貝採りなどが行われている間に海岸、河口部の水辺の利用実態を調べ、**アクセス性に関する課題を把握する**こととした。

■ＷＧ風景①（豊橋カリオン）

■ＷＧ風景②（豊橋カリオン）

矢作川流域圏懇談会
「第３回海部会ＷＧ（観察会関係の情報収集）」開催報告

開催日時：平成 24 年 7 月 7 日

○ ＷＧのメンバーでもある伊勢三河湾流域ネットワークが主催し、愛知県が後援、東幡豆漁業組合が協力する**「三河湾環境再生プロジェクト」（あいち森と緑づくり事業の助成事業）を個別の活動の一つとして情報収集（課題、ポイント等を整理）**した。

○ 講師は、東幡豆漁協 石川組合長、六条潟と三河湾を守る会の市野氏、愛知県水産試験場 岩田漁場環境研究部長の３名で実施。

○ 観察会は、見て、触れて、味わい、採取もできる**五感で楽しめる事が重要**。

○ 参加費は、大人¥2000 子ども¥500 であるが、名古屋と豊橋からの計 50 名のバス代、お昼代等が含まれ、**補助金をもらわないと参加費が高くなる運営上の課題が予想される**。

■講師紹介

■水産試験場 岩田講師の講演

■アサリの浄化実験

矢作川流域圏懇談会
「第３回海部会ＷＧ（観察会関係の情報収集・事務局で補足）」開催報告

開催日時：７月 21 日

○ 愛知県環境部水地盤環境課の主催する「三河湾環境再生プロジェクト」の干潟の生き物観察を**個別の活動の一つとして情報収集（課題、ポイント等を整理）**した。

○ 講師は、東幡豆漁協 石川組合長、愛知県水産試験場 岩田漁場環境研究部長、水地盤環境課で実施。

○ 募集定員は 40 名。**募集多数につき抽選となり全員は参加できていない。**

○ 市民の環境学習の効果を高めるために、一つ一つの行動後に参加者の意見、とりまとめを行い**市民として何ができるかを確認しながら進める点がポイントである。**

○ **水産試験場や漁協等の積極的な協力により分かり易く、円滑な進行**が可能となっている。

■受付後前島に移動

■事前採捕生物に触れる

■試験場岩田講師の説明

■採取生物の確認

矢作川流域圏懇談会
「第４回海部会ＷＧ（アクセス改善調査→絆再生調査）」開催報告

開催日時：平成 24 年 8 月 12 日

○ 第４回部会ＷＧは、流域圏の海地域の利用実態や護岸等の整備状況等から**市民が海へ立ち寄り難くなっている要因などを把握するための調査（アクセス改善調査）を実施**した。

○ 駐車場所、スロープ等があり**水辺へアクセスしやすい場所では十分に利用**がされていた。

○ 駐車場や水場が整備されており、**子どもを安心して遊ばせられそうな一色の人工干潟**では、アサリ稚貝の養生中で**立入りを制限**する網柵があった。

○ 漁業権の設定がありアサリ資源の保護が優先される場所であるが、**親水のための部分的な干潟の解放などができる良いとの意見**も挙がった。

○ 農業生産の向上を図るための干拓、現代の暮らしを支える発電所や下水処理場などための埋立てによる干潟の喪失、塩田の操業・撤退など、**現代の暮らしとの海との距離が如何に生まれてきたかの変遷についても一部の状況を確認**できた。

○ 物理的な障害を解消するアクセス性の改善に留めず、昔と今の暮らしを対比しながら希薄になった現代の暮らしと海との関係を取り戻すために、**市民が海へ関心を持つための仕掛け等について様々な観点で検討するための**課題として課題名を後日、変更した。

■利用者が整備した階段

■河口部利用者の駐車状況

■アサリの養生中の干潟

■地元に解放された砂浜

矢作川流域圏懇談会「第５回海部会ＷＧ（ごみ・流木関係）」開催報告

開催日時：平成 24 年 9 月 8 日（平成 24 年 10 月 18 日）

○　ごみ流木に関連し、ＷＧメンバーでもある井上氏が共同発起人を務める３県１市で取り組む**「答志島 奈佐の浜プロジェクト」について個別の活動の一つとして情報収集**した。

○　その後、平成 24 年 10 月 18 日に３県１市の会議にて、井上部会長より**海部会が提案する「ごみ、流木調査」を案の段階で提示**し、行政と市民団体が協働してやっていこうとする方向性は一致しており**関心を持たれた**ことの報告があった。

29　愛知総合市　2012年（平成24年）9月9日（日曜日）

（第3種郵便物認可）

漂着ごみ 浜をきれいに

東海地方のボランティアが清掃

三重・答志島

伊勢湾のごみが集中的に漂着する三重県鳥羽市の離島・答志島の奈佐の浜で八日、東海地方のボランティア約三百人が海岸の清掃をした。約六十の環境団体などでつくる「二十一世紀奈佐の浜プロジェクト委員会」の事業。「百年後に漂着ごみゼロ」を目指す奈佐の浜アピールも採択した。

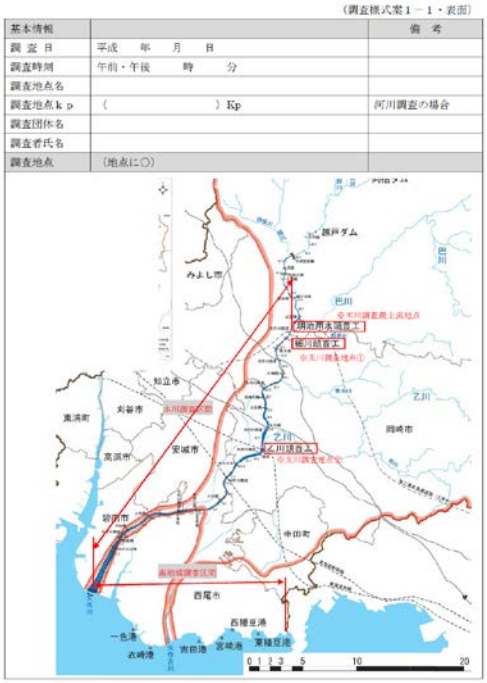
六月に続き二回目で、今回は離島より訪問が容易な本土の一部海岸も、子連れのボランティアらの活動先に設定。市内にある海の博物館の見学など学習要素も加え、離島組とは別の約百八十人が参加した。

奈佐の浜の海岸線は二百メートル余。作業用手袋をはめたボランティアたちは砂浜を覆う流木や空き缶、発泡スチロール片などを可燃と不燃に分けてごみ袋へ。約一時間の作業で二・四トンを回収した。作業後、鳥羽小学校でシンポジウムも開いた。

初めて参加した名古屋市西区の大学一年、早川翼さん（二十）は「浜は想像以上に汚かった。普段からごみの分別を徹底し、ポイ捨ては絶対しないようにしたい」と誓っていた。（片山健生）

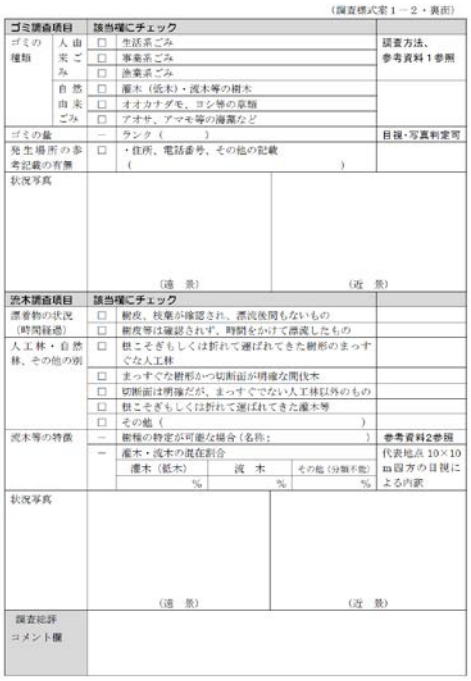
砂浜を覆うごみを黙々と回収するボランティアたち＝三重県鳥羽市の離島・答志島の奈佐の浜で

■答志島奈佐の浜海岸清掃の様子



（調査様式案１－１・表面）

基本情報		備　考
調 査 日	平成　　年　　月　　日	
調査時刻	午前・午後　　時　　分	
調査地点名		
調査地点ｋｐ	（　　）Kp	河川調査の場合
調査団体名		
調査者氏名		
調査地点	（地点に○）	



（調査様式案１－２・裏面）

ゴミ調査項目		該当欄にチェック	
ゴミの種類	人由来ごみ	□　生活系ごみ	調査方法、参考資料１参照
		□　事業系ごみ	
		□　漁業系ごみ	
	自然由来ごみ	□　灌木（流木）・流木等の樹木	
		□　オオカナダモ、ヨシ等の草類	
		□　アオサ、アマモ等の海藻など	
ゴミの量		－　ランク（　　）	目視・写真判定可
発生場所の参考記載の有無		□　・住所、電話番号、その他の記載（　　）	
状況写真		（遠　景）	（近　景）
流木調査項目		**該当欄にチェック**	
漂着物の状況（時間経過）		□　樹皮、枝葉が確認され、漂流後間もないもの	
		□　樹皮等は確認されず、時間をかけて漂流したもの	
人工林・自然林、その他の別		□　根こそぎもしくは折れて運ばれてきた樹形のまっすぐな人工林	
		□　まっすぐな樹形かつ切断面が明確な間伐木	
		□　切断面は明確だが、まっすぐでない人工林以外のもの	
		□　根こそぎもしくは折れて運ばれてきた灌木等	
		□　その他（　　）	
流木等の特徴		－　樹種の特定が可能な場合（名称：　　）	参考資料2参照
		－　灌木・流木の混在割合	代表地点 10×10 m 区方の目視による内訳
		灌木（紙木）　％　流木　％　その他（分類不能）　％	
状況写真		（遠　景）	（近　景）
調査総評コメント欄			

■ごみ・流木調査の調査票案（出水時調査に向けたたたき台の作成）

矢作川流域圏懇談会「第６回海部会ＷＧ」開催報告

開催日時：平成 24 年 11 月 5 日

○　ごみ流木調査は、今後の調査結果とともに、県の**対策協議会の関係の調査結果**や矢作川をきれいにする会が主催した**底引き網による海の中の干潟ごみの特徴**なども状**況確認できる資料として使える**のではと意見があった。

○　また、調査地点については、状況を一番理解している**市より大出水後に調査を行う候補地を挙げてもらう**。また、今後、**連絡体制を具体的に決める必要があること**等を話し合った。

○　生き物調査の方法や指標づくりなどについては、水産試験場の調査データ等の活用を含めて、**学識者や試験場と次年度に向けどんな方法があるかを調整**することとした。

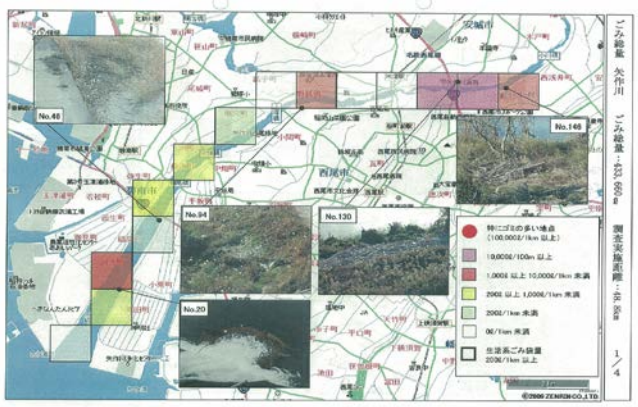
○　流域圏懇談会としては、観察会を主催するのではなく**観察会等の市民活動が円滑に運営できるように活動の仲介を行う方向で検討を進めていく**こととし、特に干潟で遊び学ぶ活動を仕掛ける**仕掛け人をどのような方法で増やしていけるかを次年度以降の課題**とし、今後、検討していくことを話し合った。

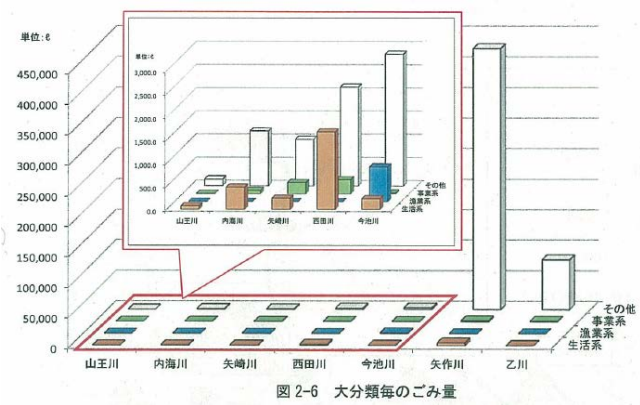
○　次回のＷＧでは、４**つの課題の具体的な方向**と、**山、川に対して何を連携提案していくか全体会議に諮る内容を話し合う**こととした。

■底引き網のゴミ選り分けの様子

■底引き網のごみ

（ビニールが底質の酸欠を招く問題も指摘）





■平成 23 年度 海岸漂着物モデル流域発生源調査報告書〔愛知県環境部資源循環推進課〕

（矢作川は、圧倒的にその他ゴミに分類される流木、灌木が多いとの調査結果）

矢作川流域圏懇談会「第７回海部会ＷＧ」開催報告

開催日時：平成 24 年 11 月 5 日

海の勉強会にひきつづき、**次年度以降の活動方針について話し合い**をおこなった。

（１）個別課題の今後の活動方針について

１）干潟再生について

・今後は、**現地調査を含め土砂の問題に関する理解を深める**こととなった。

・具体的には、海の人達も、**上流のダムの堆砂状況や山の状況などを確認する現地バスツアー**などで土砂の状況を確認することや、**河口干潟や人工干潟の対比、西浦などの干潟再生事例箇所などの調査地点の提案**があった。

（２）流域連携テーマについて

・**「ごみ、流木調査」**を協力していくこと、**「ヨシ原再生を含む干潟再生」**を川部会と連携していくこと、**「土砂の問題」**の各地域での課題認識のすり合わせや現地視察等での情報共有を進める**３点を連携のテーマとして提案**するものとした。

・遡上生物（具体的にはウナギ）の生息環境については、古川での魚道整備が計画中であることなど、改善に向けた取組みの状況を収集しつつ勉強が必要であることから、今後の課題とし連携テーマとはしない。

（３）今後の進め方への提案

・ こうした会議になかなか**出席してもらいにくい漁業者**には、この会議に来いというのではなく、**こちらから訪問**していく。

・ **流域での栄養塩類**としてケイ素に着目することが重要との**情報の共有**を図りたい。

・ スムーズな進行を行うため、**議論の要点を事前アナウンス**する。

・ 海は山、川の鏡。**海、川、山を森の回廊、水の回廊、土砂の回廊、ひとの回廊、ものの回廊**で結ぶ。